

「いっしょに闘う救い主」

マタイによる福音書 26:31-46
ヘブライ人への手紙 2:17-18

2024年3月3日
野村 友美 師

<「行こう」と呼びかけるイエス様>

先週、この礼拝堂で私たちと一緒に礼拝しておられた方が、まさにその礼拝から帰られた後に、100歳の人生の旅路を終えて、神様のもとに召されました。本当に、神様がなされることは、私たちには計り知れません。

私たちの思いを超えて、神様がそれぞれの人生の旅路を導いておられること。それぞれの命の最初から最後までを、神様が抱きしめてくださること。それを改めて感じさせられました。迎える1日1日、進む1歩1歩の先に何が待っているのか、私たちには計り知れません。一寸先は闇に見えていても、二寸先に何かあるのかは、神様だけがご存知なんです。

「立て、行こう」と、今日の聖書の場面の最後に、イエス様は弟子たちに言っておられます。眠っていた弟子たちを起き上がらせて、「さあ行こう」と言われた、イエス様の行き先。そこで待っているのは、まさにこれからイエス様を捕まえて十字架刑で殺してしまおう、と企んでいる人たちでした。イエス様を憎む人たちの敵意と殺意、人々からの侮辱、十字架に打ち付けられる痛みと苦しみ、誰からも味方してもらえない、神様にさえ助けってもらえない孤独、そして、長い苦痛の後にやって来る死。これから行く先に待っているものを、イエス様は知っておられました。

「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません！」

「たとえ、一緒に死ぬことになっても、わたしは絶対に裏切りません！」

胸を張ってそう言い切った一番弟子のペトロも、他の弟子たちも、結局イエス様を見捨てて逃げてしまうことだって、イエス様はご存知でした。

「立て、行こう」どころか、「やっぱりいやだ、行きたくない！」って叫んで抵抗したって当たり前です。それでもイエス様は、「行こう」と弟子たちに呼びかけて、行きたくないはずの場所に向かって歩き出されました。

<ゲツセマネの園で>

イエス様は怖くなかったんでしょうか？

神の子だから、神様に信頼していたから、怖さも不安も感じないで落ち着いていられたんでしょうか？そうじゃなかったことを、今日の聖書の物語は私たちに伝えています。

「行こう」と言われる直前まで、イエス様が何をなさっていたのか、何を感じておられたのか、このゲツセマネの園での出来事がリアルに私たちに教えているんです。

最後の晩餐の食卓を囲んだ後、イエス様は弟子たちと一緒にオリーブ山の中腹にあるゲツセマネの園にやって来られました。

ゲツセマネという名前は、ヘブライ語で「油しぼり」という意味だそうです。オリーブの実を収穫したら、ここで潰して搾って、オリーブ油を取っていたんでしょうね。

福音書を読んでいると、イエス様たちはよくオリーブ山に行っていますから、このゲツセマネの園もおなじみの場所だったんでしょう。

この時、イスラエルは過越の祭の時期でした。

神殿があるエルサレムには、たくさんの人が集まってきていました。もちろん泊まる場所も、いっぱいだったはずですよ。

だから、もしかするとイエス様たちは、このよく知っていてホッとできる場所で、野宿をする予定だったのかもしれませんが。

ゲツセマネの園に着くと、イエス様はペトロとゼバダイの子たち、つまりヤコブとヨハネの3人だけを連れて、他の弟子たちから少し離れたところに入っていかれました。

ペトロとヤコブとヨハネは、元々ガリラヤ湖で魚を獲っていた漁師で、イエス様のいちばん古い弟子たちです。長い付き合いで、イエス様にとっていちばんホッとできる3人だったでしょう。ホッとできる、ということは他に気を配らなくてもいい、安心して自分を表に出せる、ということでもあります。

慣れ親しんだホッとできる場所で、ホッとできる人たちに囲まれて、そこで初めてイエス様は安心して、ご自分の気持ちを表に出されたんじゃないでしょうか。側にいるのがペトロたちだけになった途端、イエス様は悲しみ悶え始められた、と聖書は描いています。

それまでずっと一人で抱えておられた悲しさとか怖さとか不安な思いに、イエス様は正面から向き合われたんです。そして「わたしは死ぬほど悲しい」とペトロたちに訴えて、ここを離れないで一緒に目を覚ましているように、と彼らに頼んでおられます。

ペトロもヤコブもヨハネも、この時イエス様がどんな思いでおられたのかは、あんまりよくわかっていない様子です。わかれ、という方が無理だったでしょう。それでもイエス様は、ペトロたちを頼りになさいました。

同じことを体験しなくてもいい。同じ気持ちを味わわなくてもいいから、せめて一緒に起きていてほしい。そのぐらいイエス様はこの時、怖くて寂しくて心細かったんです。

そのままペトロたちからちょっと離れると、イエス様は一人で祈り始められました。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」

この短い祈りの言葉に、イエス様が味わっておられたいろんな気持ちが凝縮されているように思います。杯は、特に旧約聖書では、人間の罪に対する神様の怒りと裁きを表すモチーフとしてよく使われています。神様の嘆きと怒りが、あふれそうになっている杯。

神様を無視して自分勝手に暴走する、私たち人間の罪がもたらす「杯」は、本当なら私たち自身が受け取らなくてはいいけないものです。

理不尽な支配と抑圧、争いや暴力、そういった罪の連鎖が生み出す悲しみ、痛み、屈辱、恐怖、孤独、そして絶望。辛くて苦い、でもそのまま何もなかったことにはできない杯を、私たちみんなの代わりにイエス様が受け取って、飲み干してくださいました。それがイエス様の十字架での出来事なんです。

できることなら、誰だって受け取りたくない杯です。しかも、イエス様ご自身には関係ないはずの杯なんです。すべての人を罪から解放して、神様と一緒に生きられるようにする。

そのためにイエス様は、すべての人の身代わりとして、この杯を受け取ることになっていました。

でも神様、私の父よ、できることなら、この杯をわたしが受け取るんじゃないかと、何か他のやり方になりませんか？そうイエス様は祈られまし

た。イエス様は確かに神様のひとり子で、そして確かに私たちと同じ一人の人間として、この世界にお生まれになった方です。

怪我をしたら痛いし、疲れたら休みたくなるし、お腹は空くし、お腹がいっぱいになったら幸せを感じる。嫌なことをされたら悲しくて悔しいし、親切にされたら嬉しい。誰かが泣いていたら一緒にしょんぼりするし、誰かが喜んでいたら一緒に笑いたくなる。

そういう当たり前の感覚を、イエス様も私たちと同じように味わって生きておられました。

私たちと同じように、イエス様も喜んだり悲しんだり、笑ったり泣いたり怒ったり、不安になったり安心したりなさったんです。

だから、痛くて苦しい十字架につけられることも、辛い悲しい思いを味わうことも、イエス様は決して平気なんかじゃありませんでした。

「できることなら、そんな苦しみを私に味わわせないでください!」「でも、わたしの願いどおりではなくて、神様、あなたの思いどおりになさってください。」

そう言って、イエス様の祈りは揺れ動きます。

どうしようもなく湧き上がってくる「怖い、嫌だ」という気持ちと、「それでも神様に信頼してお任せしよう」という思いが、どちらも必死で闘っている。それが、ゲツセマネで祈られたイエス様の祈りでした。

<一緒に闘う救い主>

祈って、闘って、イエス様はいったんペトロたちのところに戻られます。でも残念ながら、ペトロもヤコブもヨハネもぐっすり眠ってしまっていました。夜でしたし、ご飯の後でお腹いっぱいだったでしょうし、眠たくなるのも無理はあり

ません。「イエス様ちょっといつもと様子が違うけど、大丈夫かな?」ときっとペトロたちも心配はしていたでしょう。

それでも、よく分からないし暗いし眠たい、という誘惑には勝てませんでした。

ついさっきイエス様に向かって「絶対にあなたを裏切ったりしません!」って威勢良く宣言したところなのに。こんなにちょっとした間でも、あなたたちは私と一緒に起きていられないのか、とイエス様は残念そうです。

「目を覚まして起きて祈っていなさい」と、もう一度言ってイエス様はまた祈りに行かれました。でもやっぱり、ペトロたちは起きていませんでした。たぶん3人とも、頑張ったんだと思います。

「ひどく眠かったのである」とマタイの福音書は、ペトロたちが頑張ったけど眠気に勝てなかった、ということをはのめかしています。

2回目はもう、イエス様はペトロたちを起こされませんでした。できの悪い弟子たちにあきれて諦めた、というよりはきっと、イエス様はペトロたちの寝顔を見ながら、覚悟を決めておられたんじゃないかな、と思います。

イエス様の祈りも、2回目は変化しています。「できればこの杯を過ぎ去らせてください!」という必死の願いは、「わたしが飲まないこの杯が過ぎ去らないなら、神様、あなたの御心が行われますように」と受け入れる言葉に変わりました。愛する弟子たちが、そしてすべての人たちが抱えているどうしようもない弱さを丸ごと背負って救おう、という覚悟を祈りの闘いの中でイエス様はお決めになったんです。

私たち人間の痛みも苦しさも、恐怖も不安も寂しさもご自分のものとして知っておられるイエ

ス様だからこそ、私たちみんなに寄り添うことがおできになる。そう聖書は教えています。

強くて信仰深い特別な人たちだけを助けるのではなくて。怖がって迷って、逃げ出したり失敗もする、でも神様が命を与えて愛して大切に思っておられる。そんなすべての人を助けるために、イエス様は痛みも怖さも寂しさも当たり前に味わう、一人の人間としてお生まれになりました。

「この人はこんなに怖いんです、こんなに不安で、寂しくて、苦しんでいるんです！」と、私たちの弱さを私たちの側から、一緒に神様に訴えてくださるために。

私たちすべての人の救い主になるために、イエス様はゲツセマネの園の暗闇で一人、祈りながら私たちの闘いを先に闘ってくださったんです。そのことを、新約聖書のヘブライ人への手紙がこう証言しています。

「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。」

(ヘブライ2:17-18)

「こうなってほしい」「こうしてください」「これは勘弁してください！」って神様に願う気持ちと、「いちばん良い道を知っておられる神様に信頼してお任せします」という信仰の告白を闘わせながら、私たちクリスチャンは日々祈る者です。身の回りでも、世界のあちこちでも、理不尽な出来事が起り続けているこの世の中で、

私たちの生活も祈りも、毎日が闘いの連続だと言えるでしょう。

一人一人のこの闘いを、イエス様がいつだって私たちと一緒に闘っていただきます。

祈ることに疲れてしまう時も、頑張りきれなくて眠りこんでしまう時も、私たちの弱さを丸ごと背負ってくださったイエス様が、いつだって私たちと一緒におられます。

どうしていいのかわからない、誰にも頼れない、誰もわかってくれない。そんな孤独を感じる時だって、祈る私たちは絶対に一人にされることはないんです。

イエス様が私たちを背負って、私たちと一緒に闘っていただきます。さあ、今日もイエス様と一緒に、私たちはここから出て行きましょう。

祈りながら、闘いながら、神様の愛と救いがすべての人にあらわされる日を目指して、この先も人生の旅を続けてまいりましょう。

お祈りいたします。